楽しいを表現でき、豊かになるコミュニティ

長崎県西海市大瀬戸町　雪浦ウィーク実行委員会

長崎駅からバスに乗る。海沿いを走り、遠藤周作文学館を通り過ぎると、雪浦に着く。今回取材した雪浦ウィークは、この雪浦というまちを舞台に、雪浦をこよなく愛し、ここに暮らし、またはここで活動する人々が出展するイベントだ。このイベントは、自宅や工房を開放し、訪れる側・迎える側の双方が共に楽しめ、顔の見える交流を続け、今年で25年を迎える。

雪浦ウィークが始まったのは、1999年。現在、「NPO法人雪浦あんばんね」の代表をしている渡辺督郎さんが企画した。前年に、移住した陶芸家がイベントを開いたところ、他県からも雪浦に訪れてイベントを楽しんでくれたのがきっかけだった。そこで、年々過疎化が進むこの地域に興味を持ってもらえる人を増やすため、地元の川添酢造有限会社社長の川添成行さんや地域の方々を巻き込み、イベント開催について話し合う。そして、1週間、雪浦を解放するという意味で雪浦ウィークと名付け、地域回遊型のイベントとして13店舗で始まった。

この取り組みは、雪浦の魅力を発信ができることはもちろん、移住した方々の表現の場としても機能しており、定住と移住の効果が生まれている。そんな取り組みに対して、2009年に長崎県地域文化賞受賞、2013年には総務省・全国過疎地域自立促進連盟会長賞受賞として評価され、これからの地域のあり方に大きな指針を示している。

25年目になる今回の雪浦ウィークは、新たな会長として久保桂奈さんが担う。5月2日~5日まで開催し、若い世代も参画し、雪浦の内外から約30店舗と雪浦小学校の子どもたちや地域の方々が県内・県外から来るお客をもてなした。様々な催しが行われたが、今年から地域の子どもたちが雪浦をガイドする「こどもガイド」も始まり、大きな反響があった。また、石川県輪島市名舟町に伝わる「御陣乗太鼓（ごじんじょだいこ）」に学び、38年ほど前から雪浦の祭りの際に披露される中区豊年太鼓の奉納踊り

が披露された。今年元旦に被災された能登半島の復興への願いを込めて演舞がされ、集まった義援金を御陣乗太鼓保存会へ届けた。今回の雪浦ウィークでは、売り上げの一部が能登半島地震の被災地復興のために寄付された。

雪浦ウィークの最終日に取材した私たちは、この地域が豊かに続いていくことのエッセンスを掴むことができた気がする。それは、「表現する」ということ。

昨年の6月に移住したばかりの安藤卓巳さんは、手作り雑貨や自家焙煎珈琲の販売などをやられていた。安藤さんの妻が隣の地区である大串地区の出身で、その父が持っていた柿の畑を有効活用したいとのことで、移住した。雪浦ウィークに参加したきっかけとして「雪浦地区や大串地区のある西海市を良くしていきたいという想いにひかれて参加した」と地方の郷土饅頭である「かっからん饅頭」を皆に渡しながら説明してくれた。

雪浦ウィークの宿泊の拠点になっているゲストハウス森田屋。そこに、2020年に約20年ぶりにUターンしてきた荒瀬美佐子さんがいる。コロナ禍の中、実家に戻って子育てをしようと決めた。荒瀬さんは、2018年に雪浦で初めてできたゲストハウス森田屋で働いている。ここは、雪浦村時代の村長宅だった築90年の古民家をリノベーションしたゲストハウスだ。また、2021年からは親子で季節に応じた自然体験ができる「森のようちえん」を開催。2023年からは「ちいき食堂だんらん」として地域のお寺と一緒にみんなでご飯を食べる場をつくっている。Uターンして4年が経ち、雪浦地区に思ったことを伺うと、次のように話してくれた。「この地区は、小学校を中心にコンパクトなまちで、色々な大人が自分のまちのことを好きであることを話してくれる。また、子どもたちも自分のことをはっきり表現できる子どもが多く、まち全体として、こどもたちを大切にしていることを実感する」。

雪浦ウィークに訪れていた男性に話を聞くと「長崎に住んで

いて2019年にこのイベントについて知っていたが、今回初めて参加した。とても楽しいです」とのことだった。

雪浦ウィークをはじめた渡辺さんに、このイベントへの想いについて聞くと「経済面よりも交流が大切で、自分たちも客も楽しむこと目指している。音楽があり楽しい地域であり、訪れた人が、都会に行かなくても良いかな、と思ってくれたら」と語ってくれた。

雪浦ウィークの最終日では、雪浦小学校の体育館で、川添成行さん率いる地元の音楽グループと小学生が、南米で生まれた縦笛であるケーナと持ち寄った楽器を使って、「コンドルは飛んでいく」を披露した。雪浦小学校では約25年前から川添さんが中心となり、ケーナづくりとケーナ演奏の指導をしている。この演奏に、川添さんは小学生のお孫さんと一緒に参加されていた。実は、そのお孫さんは、川添さんの娘で、雪浦ウィーク会長の久保さんのお子さんだ。

雪浦ウィークのこれからについて久保さんは次のように語ってくれた。「雪浦の人や雪浦が好きな方、雪浦に関係がある方と一緒に、雪浦の文化や生き方といった私たちが大切にしてきたことを表現しながらも、より雪浦のことが好きになってもらえるように、来られる方を明るく楽しく迎えたい」。残念ながら、川添成行さんは、取材後の6月9日に帰らぬ人となったが、彼が残した雪浦の文化をたくさんの若者が受け継いでいこうと動き出している。ケーナも、その象徴として、息子の光蔵さんが音楽活動をはじめている。

言葉では表現できないものを表現できるよう、ケーナが雪浦の若い世代に受け継がれている。久保桂奈（くぼけいな）さんは、そんな世代を表現しているのかもしれない。

【連絡先】雪浦ウィーク実行委員会
TEL 0959-31-4071（ゲストハウス森田屋）